民俗学における個と社会

——20世紀初めのフォルク論争を読み直す——(4)

河野　眞

On the Individual and the Society as Principles of Folklore — A Study of the 'Volk-Dispute' in the German Folklore Circle in the beginning of the 20th century (4) **by Shin KONO**

Abstract

The present paper is a continuation of three previous papers. These deal with issues that were being debated in academic German Folklore societies in the 1920s and early 1930s. The ideas most influential and distinguished at the time were those of the folklorist Hans Naumann, a professor in Frankfurt a. M. (1922) and in Bonn (1931). It was his theory that all folk culture could be classified into one of two types : the 'Güter der primitiven Gemeinschaftskultur' (that which derived from primitive cultural societies), and 'versunkene Kulturgüter' (sunken culture). The former type has remained essentially unchanged since prehistoric times ; the latter, created originally within all intellectual upper class, was later adopted by the lower classes.

Although Naumann's ideas stimulated active discussion in academic circles and were popularly held, they do not stand up either to careful, objective investigation, or to the strict demands required of theoretical proof. Besides, he deserves to be criticized of being over simplistic when he considered the peasant of his day to be the harbinger of a primitive community culture. According to Naumann country folk never abandoned their primitive constitution with all its crudeness and vulgarity.

The warped point of view implicit in Naumann's theories were not confined to him but were shared by his contemporaries and even by famous predecessors in other western countries besides Germany. Naumann's theories owe much to the influence James George Frazer an Englishman, and to Lucien Lévy-Bruhl a professor of anthropology in Paris. The 'Volk-Dispute' cam therefore be seen as being marginally associated with more general western-wide Neo-Romantic philosophical movement which finds its expression in the person and opinions of Hans Naumann. Eventually, he became an active Nazi, — although he considered that he himself, on occasion, had been persecuted by his comrades.

Ⅶ. ハンス・ナウマンの二層論

20世紀初めにドイツ民俗学界で起きたいわゆるフォルク論争は，オイゲーン・モークが参

画したあたりで，ひとまず落ち着いた。モークの主張が特に評価されたわけではないが，何となく議論は止んだのである。モークの論は折衷案であるだけに，無難であった。議論の俎上に上った諸々の項目をともかくもまとめていたのである。しかし理論として明瞭な輪郭をもつには至らなかった。そこに十数年後に議論が再燃する余地があったのである。

その間には，社会状況にも世界の構図にも大きな変化があった[1)]。1900年代後半から1920年代までには，第一次世界大戦がはさまっている。その大変動に先立つ時代はドイツについて言えばヴィルヘルミーニッシュであり，ビスマルクの偉業が余光を保ち，ヨーロッパの国際秩序も根底ではウィーン体制にまで溯る構図が基本をなしていた。しかもその時代は，西欧諸国による地球の広い地域への植民地支配の頂点でもあった。

しかし第一次世界大戦を経過したあとのヨーロッパの様相は，まったく異なっていた。支配体制を見ると，皇帝は退位し，共産主義者の不発に終った革命をはさんで，戦前には野党の思想にすぎなかった社会民主主義が政権に近づいていた。世界の政治地図においても，戦火で弱体化したヨーロッパ域内の諸国の前に，同じく西洋文明の周辺に位置していた2つの大国が存在を際立たせた。アメリカ合衆国の西洋への影響が強まり，またロシア革命によって，それまでになかった種類の国家，ソ連が出現した。国際連盟が結成され，民族自決の原理による小国家群が成立した。ヨーロッパ諸国の国民経済は戦争によって破壊されながらも，新たに流入する資本によって嘘のように活況を呈しはじめた。過去の指導層に代わって，大衆が表舞台に登場した。

しかしそれらのいずれの要素もなお未来に向けての決定的な意義を獲得はしてはいなかった。皇帝は退位したものの，君主制への回帰の志向も消えていなかった。アメリカは大戦を終らせたが，なお世界の主人公ではなく，国際連盟を提唱しただけで，後退していった。ロシア革命は社会主義が未来を制する兆しであったが，早くもそれへの幻滅も始まっていた。民族自決を旗印にした小国は自前でやってゆくには，心もとなかった。地球上の広大な地域にまたがる植民地が，なお果敢な抵抗運動には程遠かったものの，不穏な様相を呈してきた。破壊による困窮が実相なのか，好景気が本物か誰にも分からなかった。大衆が社会を運営することには，不安と混乱が付きまとった。いずれの要素が未来を主導するのか，なお分明ではなかった。

動乱をはさんで，自己認識の質も変化した。前世紀末から大戦期まで思索をつづけたマックス・ヴェーバーは，普遍性と合理性の達成を西洋文化の比類のない資質と成果として誇り，しかも説明の矛盾に無頓着でいることができた。しかし大戦末期には，オスヴァルト・シュペングラーの『西洋の没落』が予言の書のように迎えられていた。前者の精神作業は緻密で論理的であり，気品のある文体には静謐が漂っていた。後者の論説は，通俗知識の継ぎはぎであり，粗雑ですらあったが，着想の独創性が欠陥を補って余りあることでは，同時代のもうひとつのグローバルな規模の着想，アルフレート・ヴェーゲナーの大陸移動説と通じても

いた[1-a)]。

さらに視点を主導的な政治思想に向けると，第一次世界大戦の後の時期には，なおデモクラシーやリベラリズムも決定的な価値基準とはなっていなかった。〈黄金の20年代〉は，まことに中途半端で，将来の見極めが難しい時代であった[2)]。しかも時代がこれまでにない速度と規模で動いていることは，見紛いようがなかった。転換点にあることは感得されたが，行方は不透明であった。その状況が，西洋文化が陰で養分をあたえてきた暗黒の流動に形をとることをうながした。ファシズムであり，ナチス・ドイツである。地下水脈が地上にあらわれたのである。

学問の世界も，そうした歴史の推移と無縁ではなかった。世界大戦の痛手がなお消えやらず，新時代への助走期でもあった1920年代の初めに，民俗学界ではハンス・ナウマンが，これまでの論争を解決するかのような理論を携えて登場した。それは大いに歓迎される一方，また攻撃にもさらされた。しかもその攻防の全体は二流のドラマであった。

ハンス・ナウマンの経歴[3)]

ハンス・ナウマン（Hans Naumann 1886–1951）は，シレジアのゲールリッツ（Görlitz 現在はポーランド領）に生まれた。長じてシュトラースブルク大学でゲルマニスティクとラテン文学を学んで1911年に博士号を取得し，次いで1913年に同大学で「ノートカーのボエティウス翻訳」（Notkers Boetiusübersetzung）のテーマでゲルマン文献学と中世ラテン文学の（Germanische Philologie und Mittellatein）の分野で教授資格を得て，1918年に同大学の名目教授（Titularprofessor）になった。1919年にイェナ大学へ呼ばれ，1919年末に員外教授となった。彼がイェナにいたのは1919年から1922年までであるが，この時期には同時代を対象とした文芸論や・文化論を講じて学生のあいだに人気があったほか，文芸愛好を媒介にした社会活動にも熱心で，イェナでつくられたその種類のサークル「アカデミー・文学部同好会」（Akademisch-literarische Gesellschaft）のリーダーとなって市民のあいだでも親しまれた。ちなみにこの集まりには，若き日のヨハネス・ベッヒャー（Johannes R. Becher）や，ヴァルター・ハーゼンクレーヴァー（Walter Hasenclever），テーオドル・ドイブラー（Theodor Däubler），それにトーマス・マンも参加して，それぞれ自作の朗読をおこなった。ナウマンは，そうした社交家であり，才能のある若手の研究者でもあったところから，イェナに本部をおく出版業者オイゲーン・ディーテリヒ（Eugen Dieterich）の後援を受けることとなり，その寄託によってイェナ大学に1920年1月1日に設けられた「チューリンゲンを中心にしたドイツ民俗の特別講座」の担当者となった。これは，ドイツの大学での最初のドイツ民俗学の講座となった。

1921年に，ナウマンはオイゲーン・ディーテリヒ社から，論文集『プリミティヴな共同体文化』を刊行し[4)]，さらに翌年には，『ドイツ民俗学概論』を世に問うた[5)]。これがドイツ民

俗学におけるハンス・ナウマンの主著であった。この2著は出版されるや，学術書としては異例のベストセラーとなった。同時に1920年代を通じて民俗学の分野において議論の的になった。

ハンス・ナウマンは，1922年にフランクフルト・アム・マイン大学においてドイツ古典文献学の最初の正教授のポストに就いた（Ordinariat für Ältere germanische Philologie）。そしてこの本務と並行して，民俗学の講義と演習を担当した。すでにこのフランクフルト時代に，後にファシズム的な考え方に行き着くようなイデオロギー性にナウマンが傾斜したと見る人もいる[6)]。

ナウマンは，そのゲルマニスティクと民俗学の2つの分野での著作によって，まもなく国内でも国外でも，もっとも名声のある学者，講演家，大学教授となった。たびたび外国に客員教授として招かれ，アメリカ合衆国にも1学期間滞在した。ドイツでは，ある程度の大きさの都市で，ナウマンが講演に招かれなかったところはないと言ってもよかった。得意のレパートリーは，中世ドイツ文学を古ゲルマンや上古の神話と関係づけて論じることにあった。「ヒルデブラントの歌」，「ヘーリアント」，ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデやヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハが描いた人物像，それらを「エッダ」の神々と結び付けるといったものである。また中世の初期や中期の王たちの事蹟を神話的に解釈することにおいても器用であった。特に中世の王たちに，天上と地上，大宇宙と小宇宙をつなぎわたす存在をみとめるのは，ナウマンの一貫したテーマだったようである[6-a)]。

1931年にナウマンはボン大学に招かれた。そして1932年から1945年まで，そこを拠点にして活動した。ボンでの担当講座も，ドイツ古典文献学（Ältere germanische Philologie），すなわちゲルマニスティクであった。ちなみに前任者はルドルフ・マイスナー（Rudolf Meissner）であった。またフランクフルトでの彼の後任には，ユーリウス・シュヴィーテリングが就任した[7)]。

ナウマンは，1932年に政治的な信条告白とも言うべき書物『危機のなかのドイツ国民[8)]』を刊行した。これは，忠従観念（Gefolgschaftsgedanken）の再生，ゲルマン連続性の昂揚，国民観念と社会観念の統合によって，1918年以来の誤って道筋を是正することをうたっており，またその悲願をナチ党とヒトラーに託したものであった[8-a)]。またこの1932年の総選挙を前にした7月1日にはナチスの機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』紙上に，ドイツとオーストリアの大学教授50人の連名で，教養知識人が主導する市民思想を弾劾し，ナチズムのもとに結集する呼びかけが掲載されたが，ナウマンは，それに名前を連ねた3人のボン大学教授のひとりであった[9)]。これにつづいて1933年5月1日に，彼はナチスに入党した。これは〈ポツダムの日を念頭に〉していたことを，彼は1945年に述べている。1933年5月10日におこなわれたボンの中央広場での焚書にさいして，最も重要な講演者として群衆の前に立ったが，これはファシズムのイデオロークとしてのナウマンの公的な活動の頂点であった。ち

なみに1945年以後に受けた審査において，ナウマンは，その焚書については，どちらかと言えが無邪気なもので，けっして被害をあたえるようなものではなかったとの釈明によって，責任を回避しようとした。

こうしたハンス・ナウマンの言動を早くから知っていて冷静な観察を行っていた人に，トーマス・マンがいる。その人物評に曰く。〈……ピントのはずれた高等ナチスト，浮ついたゲルマニストのタイプに属した人物で，気高く純粋なドイツ民族という夢を頭に描いて，汚い手管と自分の夢想を混同するに至った《不幸なインテリゲンチャ》のひとりであった[10)]〉

1934年11月4日に，ナウマンはボン大学の学長に就任した。その就任の講演は，彼がおこなったヒトラー賛美の講演のなかでも装飾過剰で拙いものであったようである。またその後1937年と1939年のヒトラーの誕生日におこなった講演の方も，それに輪をかけてひどかったらしい。これらからも明らかなように，ナウマンは旗旆鮮明なナチストであったが，1935年の2月には，早くもボン大学学長のポストを解任された。神学者カール・バルトを追放するにさいして，ナチ党が望んだほど積極的ではなかったからであったと言った。また1937年には，トーマス・マンにたいして名誉博士号の否認と市民権の剥奪がおこなわれたとき，それに明確に反対したただひとりのドイツの大学教授であり，このためナチスから譴責を受けた[10-a)]。

ナウマンは，ナチ党政権という新しい体制のなかでの自分の位置を確保することを意図して，『ドイツ民俗学概論』の第3版を，当時の風潮に合わせた用語や当慣用語で書き直した。それにもかかわらず，彼はナチ党，特にアルフレート・ローゼンベルクの一派から激しい非難を浴びせられた[11)]。1937年には，『ドイツ民俗学概論』第3版の大半が押収された。またこの時点からは，民俗学の講義や講演を禁じられ，また民俗学の叙述を刊行したり，ラジオ放送をおこなうことも禁止された。遅くとも1935年には，彼は民俗学者としては，現実には一切の活動ができなくなっていた。しかしナチスを信奉する彼の信条はそれ以後も変わらなかった。ヒトラーに倣った髪型と口髭はそれ以前からの彼のファッションであった。のみならず彼の2人の男の子が出征したことを誇りにしていた。

1945年にファシズムが崩壊すると，ボン大学の審査委員会は，1945年10月2日に，ナウマンが代表的なナチストであり，大学にポストを占めるには相応しくないとの判断をおこなった。イギリスの進駐軍からも，ナウマンを大学から追放し，教授資格を取り消すことが指示された。こうして始まったハンス・ナウマンにたいする非ナチ化措置は，以後3年間継続された。

ナウマンは，公式には1948年末に非ナチ化を終了したとされ，もとの地位に復帰するための法的な請求権を得ることになった。しかし復帰する以前に，ボン大学は，哲学部教授会の意向を受けて1949年4月1日付けで，彼にたいして定年退職の手続きを行なった。それにたいしてナウマンが裁判所に不服を申し出たため，その処置の適不適をめぐる審理が行われた。審理は長引いたものの，結論はナウマンの主張に好意的なものとなった。しかしそれは彼の

死後であった。判決が下る直前の1951年12月25日に，ナウマンは，臍ヘルニアの手術の不調によって突然死亡した。

〈プリミティヴな共同体文化と沈降した文化物象〉論

ハンス・ナウマンの論は，現在もまったく否定されてはいない。ある種の説得性が認められる場合もある。またその〈プリミティヴな共同体文化〉と〈沈降した文化物象〉という概念も，その当時，学界の内外で歓迎された。そのため学史的には知らない人はいないと言ってよい。またその標語は今も案外肯定的に受け入れられている面がある。

現在でもそうであるから，ナウマンが理論を携えて登場した頃はなおさらであった。ナウマンは，一般の人々をも納得させるだけの時代にかなった文章と，生来の才気煥発によって，1920年代から30年代初めには，最も頻繁に講演を依頼された学者のひとりであった。

『ドイツ民俗学概論』を，ナウマンは冒頭から民俗文化にたいする考え方を率直に説くことから始めている。それは難解ではなく，むしろ単純で，図式的であった。

ナウマンによれば，民俗文化には2種類が認められるという。ひとつは，〈プリミティヴな共同体文化〉であり，他は〈沈降した文化物象〉である。それはまた社会を二層に分けて理解する観点ともかさなっている。前者は，原初の生成にかかるものであり，恒常的で，その本来の担い手は〈下層〉である。それにたいして後者の沈降した文化物象は，起源から言えば創造されたものであり，それゆえ知識・教養のある上層が作り出したものである。それが，下層に向かって沈み込んでゆき，そこで改変されるのである。

それをナウマンは多くの事例を上げて説明した。説得的であったのは，沈降した文化物象で，要するに，民俗文化とみなされているものの多くは，起源的には，歴史的に特定の時代に，その時代の上層によって産み出されたものであるとする見解である。特に，『ドイツ民俗学概論』の第1章の「民俗衣装」は実証的にも遺漏の少ない行論とされているが，そこでナウマンは，民俗衣装とされているものの多くが上流社会のファッションに起原をもつことを豊富な事例によって説明した。また同書第6章の「民衆劇と共同体行事」，第7章「民衆本と人形劇」も比較的説得力のある個所と言ってよい。

それに比べると，〈プリミティヴな共同体文化〉の概念は曖昧なところがある。今日からは，とうてい持ちこたえることができるものでないが，だからとてそれはハンス・ナウマンの独創でもない。むしろ19世紀後半に台頭して1920年代においてもなお無理なく受け入れられた通念と重なっていた。しかも，それは決してドイツ思想だけではなかった。後にふれるように，プリミティヴな共同体文化の概念は，むしろイギリスやフランスの先例を焼き直したにすぎない面もあったのである。

ナウマンの二層論は，また個性とフォルクの関係とも重なっているが，これについても，

ナウマンはまことに明快な理解を呈示した。同時にそれは，これまでの論者の誰もが複雑な感情と共に取り組んだ〈教養〉の評価とも関わっていた。むしろ，先人の誰よりも単純な図式で理解することに躊躇しなかった。すなわち民俗文化におけるこの二つの層が発生するのは，ルネサンスによる個人の確立によってであってそれ以前は，その分裂は決定的なものでなかったという。この見方は，ルネサンスをもって近代的な自我が成立したというヨーロッパ文化の一般的な自己理解にしたがっている。同時に，それ以前にはなおゲルマン的原初性が色濃く生きつづけていたというロマン派の中世観の残滓が重なっている。

以上の諸点を具体的な記述に沿って，いくらか見ておこうと思う。先ず，冒頭から，強烈な印象を与えるのは，ナウマンが，ロマン派の民俗学を，それが民俗学の源流であると位置づけながらも，もはや尊んではいないことである。むしろ，ロマン派の民俗学が如何に時代遅れで，非学問的であるかを，小気味よいほど明快な口調で説くのである。したがって，ロマン派の民俗観の中心的な概念であった〈民俗心霊〉(Volksseele) についても，その空虚であることを暴いて躊躇しないのである[12]。

> ゲルマン考古学と同じく，ドイツのフォルクスクンデ（民俗学）もまた，学問としての起源を，基本的にはロマン主義に負っている。両学問とも，その出発点の性格を今なお保持しているが，ロマン派的な民俗学は，より現代的で，より厳密な学問としてのフォルクスクンデは，ロマン主義の民俗学とは一線を画している。ゲルマン考古学において始源が過大視されるのと同じく，ドイツ民俗学では，民衆心霊（フォルクスゼーレ）を過大視することがロマン主義の特徴となっていた。両学問は，原始性の状態が，心理的，精神的，倫理的，文化的観点において誤って評価されている点で相関しており，それゆえ原始性の状態を，生物学，民族学，さらに児童心理学の方法を通じて，さらにまた健全で偏見無き観察によって正確に把握することを覚えた者には，とうていロマン主義の民俗学は承服できるものではない。
>
> そうした慎重さが獲得された一方，ロマン派民俗学における観念的な単一性は失われた。現今の民俗学は，民族学と精神史・文化史の二つの学問の間に位置するものとなったところから，２種類の相異なった方向に引き裂かれている。現今の民俗学がかかわる対象は，理念的および物質的性質の民族学ならびに考古学の場合と同じく，民間の口承文芸と民間俗信，儀礼と行事，年中行事，誕生・成年・結婚・死亡のさいのさまざまな祭事，命名，また家･屋敷，集落，農業，村落構成，服飾などを，そこに民衆心霊（フォルクスゼーレ）が反映している限り，対象とするのである。このように多種多様な対象になにがしかの系統分類をほどこし整理をおこなうのであるが，それが可能になるのは現今の民俗学が明確な根本的問題意識をもって臨む場合だけである。それは，どれほど些細な個別現象であっても，下からのプリミティヴな共同体の文化財であるか，それと

も上からの沈降した文化物象であるかを見極めることである。前者は，民族学の領域に属するものであり，後者は精神史と文化史の領域である。フォルクスレーベンに反映され，フォルクスレーベンに不可欠のすべての事物について，そのいずれに由来するかを究明するのである。その観点から，事物であれ，文芸であれ，またその他諸々の領域の現象であれ，それらを徹底的に分析することが，民俗学の主要な目的になる。かくして諸現象の起源，年代，および意味の大部分が明らかになり，それを踏まえて，最後に民俗学は一種の体系を展開することができる。……

この分類は一見皮相に見えるかも知れないが，実際には大変重要である。プリミティヴな，すなわち未だ個人主義ではないゲマインシャフト（共同体）の本質の定義に到達し，さらにこの個人主義が存在しないゲマインシャフトと，一層高度の文化，すなわち個人主義と個別化へ進んだより高い文化との関係が明らかになるからである。

ナウマンは，そのロマン派への批判と，自分の方法がそれを克服していることによほど自信があったのであろう。ロマン派の人々が民俗文化財の消滅を嘆いた感傷性を一笑に付した[13)]。

……ロマン派の立場では，民俗財，民謡，服飾，家具その他のものが消滅することへの，永遠に繰り返される嘆きが付きものであった。しかしそうした嘆きは，現今の冷静な観察方法から見ると，当たらないことが知られよう。……ロマン派のそうした慨嘆は，歴史的見地を欠いていることに由来する。

ではナウマンの歴史的見地とは，いかなるものであろうか。ここでナウマンは，ホフマン＝クライヤーの定式の全き継承者として登場する。それを歴史という時間の軸を強調したのである。

民俗文化財は，フォルクがある限り，決して消滅しない。時代が変化するとともに，外観が変わるだけである。上層は，ひとつの文化形成体から他の文化形成体へと移ってゆくからである。上層の営為は，何ひとつとして，波紋のごとく消え去るものではない。一切が，どんなつまらないものでも，下層のなかに反響を見出す。〈フォルクは，生産せず，再生産するのみ〉，〈フォルクは，常に時代遅れであり，精神的富者の食卓からの落ちこぼれる残り物を食べつづける〉とは，現今の著名な学説である。古代や中世にはこの精神的貴族は世襲貴族と一致しており，また近代には分離してしまうのだが，いずれにせよこの学説は部分的には実証されることが見出されよう。共同体（ゲマインシャフト）から進歩が起きるとするのはロマン主義的な見方である。共同体は引き下ろすので

あり，精々，均等にするのにすぎない。民俗衣装，民衆本，民俗歌謡，民俗芸能，農民の家具調度，その他細々した品物にいたるまで，それらは沈降した文化物象である。それらの品々は，徐々に，いつともなく，時の経過のなかで，沈降文化財となったのである。言い換えれば，民俗文化財は，上層で創られるのである。

またそこから引き出すことができる帰結として，次のようにも述べる。明快な語り口はナウマンの本領でもあった。

すべて〈フォルクステュームリッヒなもの〉は，いかに美しく，親しみ深いものであっても，時代遅れであり，沈降したものである。

それだけに，その時々の上層が如何なる文化を生産するかは，その限りではすまない重みをもつことになる。すなわち，〈上層の営為は……どんなつまらないものでも，下層のなかに反響を見出す〉のであるから，そこには文化の創出者としての責任が発生する。またそれを指摘するのが民俗学の使命であるとも言う。そして好ましからざる文化として，現代の機械文明や大衆性の勝った世相やファッションを挙げている[14)]。

我々が，映画や蓄音機やオペレッタや百貨店に，その応用民俗学，すなわち実用的な民俗文物を委ねるなら，近頃の民俗文化財産が好ましいものでなくなるのは不思議ではない。民俗文化財が消滅したのでなく，その質が悪くなったのであり，その罪は上層にある。かつて騎士文化の時代は，幾多の快く美しい〈民俗舞踊〉をフォルクに残したが，今日の上層は愚劣な踊りを残している。民俗学は上層に厳しい顔を向けることにより，上層に，重大な責任を負うべきことを思い知らせる。

これまでの議論も，改めて眺めると奇妙なところがあったが，それ以上に問題なのは，〈プリミティヴな共同体文化〉の概念であった。とは言え，ナウマンの二層論は，それを措定したことによってはじめて成り立ったのである。すなわち，上層に文化の創出を認める議論も，他方でフォルクを母体とする共同体文化を措定したからこそバランスを得て，一般に認められたのである。しかしその実際は，まことに奇怪な論説であった[15)]。

プリミティヴな共同体生活（primitives Gemeinschaftsleben），すなわち，今も没個人主義的文化をになっている者の生き方を知るには，ヨーロッパを離れる必要はない。我が国でも，農業にたずさわる住民は，今も，さまざまな点でプリミティヴな共同体精神をもち，またその名残は，国民の上層にも無数に存在している。だからこそ農業にたずさ

わる人々がフォルクスクンデの対象になるのである。しかしヨーロッパの東部など，たとえばリトアニアの農民の間では，このプリミティヴな共同体の概念が大きな力を揮っていることが分かる。リトアニアの村の農民たちが最寄りの町に立つ市へ出かける様子は，さながら蟻の行列である。誰が誰であるかは，他所者にはまるで区別がつかない。同じかたちの髭，同じ髪型と同じ被りもの，同じ衣装，その上顔つきも同じ型で，誰もが似たような格好をし，身ごなしまでそっくりである。リトアニア農民の乗り物と言えば，冬は小型の橇，夏はやはり小振りの車であるが，どちらもそれぞれ一様の作りである。車を牽く馬も同じなら，馬具も同じで，車の後部に坐っている女たちも一見何の差異もない。干し草の束に腰掛けている様子，頭巾，上半身には羊皮の短衣を羽織り，下は手製の亜麻布のこしらえたスカートが色とりどりに輝いている様子までまったく同じである。小麦粉や卵やチーズの出荷をみても，まったく同じ籠や同じ容器であり，代わりに塩や香料を購うことも同一である。市のなかを巡り歩くのも群れをつくってであり，全員が単一の動きに包摂されている。意図や思念といった心の動きまで同一である。一人が笑えば全員が一緒に笑う。一人が罵ると，誰もがそれに続く……彼らは群れで思念し，群れで行動するのである。

この種類の叙述が何ページにもわたって続いていることからも明らかなように，ナウマンは，プリミティヴな人間という人間類型を措定することに，少しも疑いも抱かなかった。もとよりこの種類の論説は，今日からは指弾され嘲笑を受けているのは当然である[16]。もっともそこで言い添えておくべきは，ナウマンはヨーロッパのなかのスラヴ人や特定の民族に限ってそれを取り上げたのではないことである。ドイツ民族を材料にした場合でも，同様の指摘を行なっており，民族的な偏見ではなかったのである[17]。

プリミティヴな人間は，このように社会的に結ばれた群生動物であり，その共同体の生き方は，我が国の農民においても隣組の絶大な意義のなかにあらわれており，それは古風な仕方の多彩な行事や労働のさいに，今日に至るまで有効性を発揮している。……19世紀までは，成文化された隣組の掟があり，また隣組の会計簿がつけられて，新しい隣人の加入のさいには宴会や踊りを催して祝ったものである。隣組は，重労働，刈り入れ，家畜の出産，火災，公共の安全と秩序の維持，普請，病気，死亡，埋葬，さらに家庭の行事のさいにも相互扶助を行なった。

(ネオロマンティシズムの農民観との重なり)

ここでナウマンがプリミティヴな人間の活動として挙げている諸例は，概括的に見ても，

歴史発展のなかで形成されたと言って差し支えない。いずれの現象も，子細に検討すれば，特定の歴史的経緯と結びついた構造をみせてくるはずである。しかし，ナウマンは，集団で行なわれる，一見個性が表に出ない現象は，プリミティヴな共同体の直接の発露とみなしたのである。その点では，ナウマンの歴史学的な観点はまことに怪しげであったことになるが，しかしそれはナウマンが歴史学に疎かったと言うより，別の思想史的な脈絡とも結びついていた。ネオロマンティシズムの農民観である。そしてそれを最も直截的に表明して，いささかも疑わなかったのは，19世紀の90年代に本格的に登場したイギリスのジェームズ・ジョージ・フレイザー卿であった。その『金枝篇』の序文は，大著を進めるにあたっての方法論考ともなっているが，そこでは，次のように謳われている[18)]。

春，夏至，収穫にあたってヨーロッパの農民の行なう通俗的な祭りについて長々と説明した点については，おそらく弁明をしておく必要があろうかと思う。農民の信仰と慣習とが，その断片的な性格にもかかわらず，アーリア人の原始的宗教にかんしてわれわれのもっている最も豊富で信ずべき例証であるということは，また一般的に承認されていないところから，どれほどくり返して言っても言いすぎることはない。事実，原始的アーリア人は，その精神的素質と組織について言えば，絶滅してはいないのである。彼は今日なおわれわれの間にいる。教養ある世界を革新した知的道徳的なもろもろの大勢力は，ほとんど全く農民を変えることができなかった。彼はその秘められた信仰において，ローマやロンドンがいまある場所を大森林がおおいつくし，リスがたわむれあそんでいた時代の，その祖先たちとなんら異なるところがないのである。

この意味から，アーリア人の原始宗教に関するすべての研究は，農民の信仰と慣習から出発するか，あるいは少なくとも彼らに関する事どもによって常に指導され，それを参考にすべきものである。いま現に生きて働いている伝承によって提供される例証にくらべると，古代宗教に関する古い書籍の証明は，まことに価値の少ないものである。なんとなれば，文芸は思想の進歩を促進せしめるけれど，口頭言語による意見の遅々たる進歩をはるか後方にとりのこしてしまうからである。思想の変化のためには，文芸の二代三代は伝承生活の二百年三百年よりも力のあるものなのである。しかし，書籍というものを読まぬ民衆は，文芸によっておこされる精神的革新にわずらわされることがない。それゆえ，今日のヨーロッパにおいて，口頭言語によって伝承されてきた信仰と慣習とは，アーリア族の最古の文芸のうちに記されている宗教よりも，はるかにいっそう原始的な形を保存していると言うことができるのである。

農民の存在はほとんど永劫に不変であり，アーリア人として移動していた時代を今に持ち伝え，その口頭伝承は，最古の文献資料よりも忠実に原始の実状を伝えているというのであ

る。そんな没歴史的な人間や人間類型はそもそも存在するべくもないが，それは今日から考え及ぶ視点と言うべきであろう。19世紀末から1930年代のヨーロッパの知識人は，自国の農村という身近な場所に没歴史的な人間類型を措定することに違和感がなかったようである。それゆえ，当時採集され報告された数々の農村習俗が，アーリア人の宗教生活を知る上での第一級の資料と目されたのである。実際には，農村の民俗儀礼や行事は，歴史のありとあらゆる変遷と密接に関係しながら，形成や存続や消滅を繰り返してきたと見るべきで，そこでの習俗も幾多の変遷を遂げてきたと言わなければならない。しかしそうは考えない知識人の一群があり，また彼らの見解は相当の説得性をもつものと受け止められたのである。背景には，知識人の大多数を産み出してきた階層があり，また階層区分が固定的に機能していたヨーロッパ文化の伝統的な仕組が見えてくる。すなわち，農民を押し並べて〈愚鈍〉と蔑視して憚らないような階層社会である。フレイザーの場合も，通常なら蔑視の対象となるような人間の種類を，思いがけない観点から積極的に評価する態度をとったことを誇っているような口吻があることに注意しておきたい。いずれにせよ，現実を素直に直視するという姿勢とは対極的であり，足が地につかない空虚な前提の上に，果てしなく論説が展開されたのである。

階層社会を背景として，農民が何であるかについて，実態と絡み合わない視点が支配的であったことになる。そこに見えてくるのはしかしもつひとつ別の要素も絡んでいる。そうした農民観や歴史観が，必ずしも過去から一貫したものでも，民俗学に特有のものでもなかった点である。18世紀の末期や，19世紀の前半には，もっと足が地についた農民・農村観がおこなわれていたのである。ロマン派の民俗学の中心人物であったグリム兄弟でも，はるかに実態を踏まえ，歴史的変遷に注目をして議論をしていたのである。フレイザーやハンス・ナウマンのような見方は19世紀末から20世紀はじめならではの側面もあったのである。ナウマンは，こうしてプリミティヴな共同体を不変のまま生きている存在という観点から，農民の本質を次のように説明する[19]。

> 農民の気質や性格を悪いと言っているのではなく，プリミティヴであると言うのである。このプリミティヴな特性には，先に挙げた衣服や装飾，さらに墓地を派手に飾ること，さらに飲食において節度が欠如していること，とりわけ晴れの日に途方もなく暴飲暴食に走ることなどが含まれる。また濫費癖や金銭を湯水のように使う傾向（これは，臆病で，物をこっそり隠す性行などにみられる日頃の吝嗇性とは好対象をなしている），さらに愚鈍，怠惰，将来には理由もなく楽天的であること，他所者に疑い深く閉鎖的であること，そして利益をせしめるときの利己主義，つまり何か値打ちのあるものと分かったとたん，それを一人占めにしようとする欲の深さ，貪婪，都会人と取り引きをするさいの一種の盗人根性，隙を見てごまかそうとする狡猾，これらすべてはプリミティヴな特性に他ならない。とかく動作がのろまで，愚図で，メリハリを欠いている。しかも高

級なものには無頓着で，ほとんど関心を寄せない……

何をか言はんや。しかし，この世迷い言も，それが一人ハンス・ナウマンの不見識から出たものではなかったところに問題の根深さがあった。

（文化人類学の理論との重なり）

これは，当時，民族心理学者として大きな存在であったパリ大学ソルボンヌ校の教授リュシアン・レヴィ＝ブリュールの学説を平易な言い方におきかえたものだったのである。

リュシアン・レヴィ＝ブリュール（Lucien Lévy-Bruhl 1857–1939）は，エーミール・デュルケーム学派の当時における代表者で，〈プリミティヴ〉という概念を中心に自然民族の心理的特性について考察し，20世紀の初め以来各方面に大きな影響力をあたえた。主著『未開社会の心理機能』は，早くから知られていたが，この頃ドイツ語訳が刊行されて，一層影響力を強めることになった[20]。その論旨は，自然民族の思考は，西洋諸国のような文化民族の思考が論理的であるのとは決定的に異なっているとして，それを〈プリミティヴ〉の概念のもとに体系立てて定式化したことにあった。それによると，自然民族の心理は次のような3つの大きな特色にまとめることができると言う。① 論理以前的思考――自然民族において思考の語を用いるとしても，その中身は，論理的な因果性による推論ではなく，そこでの因果性は，予兆や魔術的作用といった神秘的な因果性によっている。② 神秘的連繋の法則――人間が関係を結ぶ他のもの，つまり人であれ物あれすべてのもの（したがって，家族，扈従，家畜，財産など）に，自己の内実を付与し，従ってそれらは人間にとって魔術的な身代わりになることができる。③ 集団表象――個体の意味を厳密に理解することから程遠いところから，人間は他の人間や人間以外の他の存在とも繋がっていると思念され，その赴くところとして，人間は，生者とも死者とも切れ目なく関係をもつように表象され（キリスト教におけるような生と死の厳密な区別を知らない），死没した祖先や未生の子孫と自己とが画然と区別されような多彩な信仰表象をもつことになる。この3つの特質を貫く原理として，またレヴィ＝ブリュールは，〈連想〉の術語を挙げた。論理的に思考するのが文化民族であり，連想によって思念するのが自然民族であるというのである。またレヴィ＝ブリュールは，これらによって特色づけらる人間類型を，主要には西洋以外の未開民族に比定したが，部分的にはヨーロッパのなかの無教養な人間群にも多少はみられるとした。またリュシアン・レヴィ＝ブリュールの用語である〈論理以前的思考〉と〈連想〉は，知識化された西洋市民の基準からはずれた人間種を解くキイワードとして一世を風靡した。ハンス・ナウマンの仕事は，当時，評価の高かったこのレヴィ＝ブリュールの理論を意気込んで取り入れたところにあったのである。そのさい，ハンス・ナウマンは，リュシアン・レヴィ＝ブリュールにも見られた

要素をさらに拡大した場合もあった。その顕著なのは，論理以前的とは，倫理以前的（あるいは道徳以前的）ということでもあるとした点である。先に引用した農民の行動様式への常軌を逸したような評価は，この推論から割り出されたのであり，むしろ理論的に解きほぐすことによって，ナウマン自身は農民たちの習性を擁護している位の認識だったであろう。なおさら度し難いわけであるが，その背後には，ヨーロッパ各国の知識人たちを被う迷妄が広がっていたのである[21)]。

これらにおいて分かることだが，農民の性格は，不道徳とみなすよりも，むしろ前道徳的と言うべきであろう。

またそれと対応して，論理的かどうかという点からは，下層の思念は，多くの点において，非論理的というより，前論理的と言うべきである。

リュシアン・レヴィ＝ブリュールと並んで，ハンス・ナウマンが，当時のもうひとりの人気が高かった学究であるイギリスのフレイザーにも依拠したことは，先にふれた。それゆえ類同魔術，共感魔術といったフレイザーの基本概念も織り込まれている。そもそもナウマンが歓迎されたのは，ヨーロッパ文化の基底にキリスト教以前の神話をまざまざと呈示したフレイザーの人気と，自然民族の心理を理論化してリュシアン・レヴィ＝ブリュールがすでにその分野の通念を形成していたことが前提であった。その土台の上に，ドイツでも平易で，しかも学問的な論調が出現したためであった。

以上は，ハンス・ナウマンの逸脱を同時代の他の有力者の見解との関連において注目した。すなわち，ナウマンの逸脱は，フレイザーやリュシアン・レヴィ＝ブリュールの逸脱でもあったのである。

注

1）例えば次の文献を参照，エーリッヒ・アイク著・救仁郷繁訳『ワイマル共和国史』4冊（ぺりかん社，1983～89；原著 Erich Eyck；*Geschichte der Weimarer Republik.* 2 Bde. Zürich 1954～56）

1–a）シュペングラーが歴史の転換を予感したのは第二次モロッコ事件（1911年）あたりとされ，その『西洋の没落』は1918年に刊行された。シュペングラーの意義は，文明論という新たな分野を切り拓いた点にあった。結果的に見れば，没落の危機を自覚し，それを遂に克服したことに，西洋文化の底力があったと言える。参照，O. シュペングラー著・村松正俊訳『西洋の没落――世界史の形態学の素描』2冊（五月書房，昭和46年；改訂版昭和52年；原著 Oswald Spengler, *Der Untergang des Abendlandes*. 2Bde. 1918–22.）

ヴェーゲナーが大陸移動説の着想を得たのは1910年のこととされており，その初版は1915年に刊行された。今日ではその後の改訂版が一般に知られている。参照，アルフレッド・ウェーゲナー著・

竹内均訳『大陸と海洋の起源』(講談社，昭和50年，原著 Alfred Wegener, *Entstehwng der Kontinente und Ozeane*. 4. Aufl. 1929).

2)〈黄金の二〇年代〉については次を参照，クルト・トロホルスキー著・野村彰訳・平井正解説『ドイツ世界に冠たるドイツ：「黄金」の二〇年代・ワイマール文化の鏡像』(ありな書房，1982)；平井正他著『現代文化の原型——1920年代』(有斐閣，1983)；平井正著『ベルリン1918–1922悲劇と幻影の時代』(せりか書房，1980) 他。

3) ハンス・ナウマンの経歴は，次の文献による: Reinhard Schmook: *Der Germanist Hans Naumann (1886–1951) in seiner Bedeutung für die Volkskunde. Ein Beitrag zum kritischen Erinnern an eine umstrittee Wissenschaftlerpersönlichkeit*. In: Brigitte Bönisch-Brednich, Rolf W. Brednich, Helge Gerndt (Hrsg.): Erinnern und Vergessen. Vorträge des 27. Deutschen Volskundekongress Göttingen 1989. Göttingen: Schmerse 1991. S. 535–542.; Derselbe, *Zu den Quellen der volkskundlichen Sichtweise Hans Naumanns und zu den Reaktionenn der Fachwelt auf dessen "Grundzüge der deutschen Volkskunde" in den 20er und 30er Jahren*. In: Kai Detlev Sievers (Hrsg.), Beiträge zur Wissenschaftsgeschichte der Volkskunde im 19. und 20. Jahrhundert. Neumünster: Karl Wachholtz 1991 (Studien zur Volkskunde und Kulturgeschichte Schleswig-Holsteins, Hrsg. vom Seminar für Volkskunde der Christian-Albrechts-Universität Kiel, Bd.26), S. 73–90.

4) Hans Naumann, *Primitive Gemeinschaftskultur*. Jena [Eugen Dieterich] 1921.

5) Hans Naumann, *Grundzüge der deutschen Volkskunde*. Leipzig [Quelle & Meyer] 1922. 邦訳には第2版を底本とした次がある。ハンス・ナウマン著・川端豊彦訳『ドイツ民俗学』(岩崎美術社，1981年〈民俗民芸双書86〉)

6) シュトローバッハによれば，これは，1918年11月のドイツ革命の挫折とその後の階級闘争の尖鋭化を背景しているという。Hermann Strobach, *Positionen und Grenzen der "kritischen Volkskunde" in der BRD. Bemerkungen zu Wolfgang Emmerichs Faschismuskritik*. In: Jahrbuch für Volkskunde und Kulturgeschichte 1. (1973), 45–91.

6–a) ナウマンの各地の講演を集成したものとして，次の論集がある。Hans Naumann, *Wandlung und Erfüllung. Reden und Aufsätze zur germanisch-deutschen Geistesgeschichte*. 2. vermehrte Auflage. Stuttgart [J. B. Metzler] 1934.

7) Julius Schwietering については，後続の部分で取り上げる。

8) Hans Naumann, Deutsche Nation in Gefahr. 1932.

8–a) この種類の見解をまとめたものとして，後年ナウマンは論集を『古ドイツのフォルク王——ゲルマンの伝承連関』を刊行した。Hans Naumann, Altdeutsches Volkskönigstum. Reden und Aufsätze zum germanischen Überlieferungszusammenhang. Stuttgart [J. B. Metzler] 1940. すでにそのサブタイトルが古ゲルマンと中世との連続性，延いては現代との連続性の要請を謳っているが，そこではオーディンを始めとする神々からフランク王国の王たち，またザクセン朝の王たちをあつかって，〈予見者としての王〉，〈詩人としての王〉，〈演説者としての王〉，〈信仰の転換における王の役割〉(異教からキリスト教への転換を指す) といったテーマがあつかわれており，それはしばしばビスマルクやヒトラーと重ねあわせられる。

9) "Völkischer Beobachter" von 1. Juli 1932. これは比較的知られた出来事であるが，改めて紙面を見ると，一面に掲載されてはいるものの，その扱いは意外に小さい。ナチ党にとっては，大学教員たちの賛同は必ずしも大々的に宣伝するというようなものではなかったらしい。

10) シュモークから重引。参照，R. Schmok, in: Erinnern und Vergessen, S. 540.

10–a) 同上，R. Schmok, in: Erinnern und Vegessen, S. 542

11) 実際に『ナチス月報』において検閲まがいの論評をおこなったのは同誌の主幹マテス・ツィークラーで，特に〈沈降した文化物象〉の概念を伝統的な知識人の偏見として非難した。参照，Matthes

Zeigler, *Volkskunde auf rassischer grundlage*. In: Nazionalsozialistische Monatshefte 5, Heft 53 (1934) S. 712; Derselbe: *Kirche oder religiöse Volkskunde?*, In: Nationalsozialistische Monatshefte 6, Heft 53 (1953) S. 675.; またナウマンはナチスに接近した観点から1935年に大幅な改訂を加えた（第3版）が，その迎合にもかかわらずツィークラーは攻撃を緩めなかった。参照，Matthes Ziegler, In: Nazionalsoalistische Monatshefte 8, Heft 88 (Juni 1937), S. 632.

12）Hans Naumann, *Grundzüge der deutschen Volkskunde*. Leipzig [Quelle & Meyer] 1922, Einleitung.

13）Hans Naumann, *Grundzüge der deutschen Volkskunde*. Leipzig [Quelle & Meyer] 1922, Einleitung.

14）Hans Naumann, *Grundzüge der deutschen Volkskunde*. Leipzig [Quelle & Meyer] 1922, Einleitung.

15）Hans Naumann, *Grundzüge der deutschen Volkskunde*. Leipzig [Quelle & Meyer] 1922, Kap IV.

16）Hans Ingeborg Weber-Kellermann, *Einführung in die Europaische Ethnologie / Detsche Volkskunde*. Stuttgart [Sammlung Metzler M72) 1985.

17）Hans Naumann, *Grundzüge der deutschen Volkskunde*. Leipzig [Quelle & Meyer] 1922, Kap IV.

18）Hans James George Frazer, *The Golden Bough*. 1st ed. London 1890, 邦訳:『金枝篇第1版序文』（1890年）永橋卓介訳（岩波文庫1951年，1966年改版，1977年第16刷）p. 7 / 8.

19）Hans Naumann, *Grundzüge der deutschen Volkskunde*. Leipzig [Quelle & Meyer] 1922, Kap IV.

20）Lucien Lévy-Bruhl, *Les fonctions mentales dans les societes inferieures*. Paris 1910.; ドイツ語訳は次を参照，Das Denken der Naturvölker. 1921, Kap IV.

21）Hans Naumann, *Grundzüge der deutschen Volkskunde*. Leipzig [Quelle & Meyer] 1922, Kap IV.